

jdzb echo

軽薄な無知

エキゾチックなのは冷静な日本人ではなく、浅薄な視線を異文化に投じる我々ドイツ人である

マティアス・ナス (Matthias Nass)

ドイツのある報道雑誌の女性編集者が採った取材方法もあり得よう。その編集者は、核災害に関する電話インタビューをするために、東京に住むドイツ哲学者の三島憲一に電話をかけた。三島に「日本は真夜中である」と指摘された後、彼女は追いかけるようにメールを発信し（「当社の記事のためには1、2の引用があれば充分かもしれない」）、次の質問を列記した。「なぜ日本人は日本に留まっているのか。我々ドイツ人には理解不可能な日本人のその態度を説明できるか。なぜ日本人は平静でありつづけ、日本に住みつづけるのか」

後々まで記録に残すに値する以上インタビュー質問は、ドイツの日本学関係者の間で広く知られることになった。その筋によると、三島は「感情を害され、憤慨し、侮辱されたと感じた」そうである。我々も、軽薄な無知の集大成としかいいようのない質問を前に、いくばくかの羞恥心を感じざるを得ない。

では、なぜ日本人は日本に留まっているのだろうか。1億2700万人の人間は、本来ならばどうの昔に出国していなければならぬのではないだろうか。日本人は、なぜ自宅に留まっているのだろうか。ドイツでヨウ素錠剤やガイガー計数管（放射線量計測器）が買占められ備蓄されるようになったときに、成田国際空港のチェックインカウンターに外国人が押し掛けたときに、東京の税務署では3月15日の納付期限までに確定申告を提出しようと日本人が列を成していたというではないか。日本人は、誠に摩訶不思議な国民である。

日本の人々は被災地の遺体を収容し、死者を弔うことに全力を投じていた。被災者に住む場所を提供し、毛布と食料と飲料水を用意することに全力を傾けていた。そして、核溶解を回避するために、津波で故障した福島原子炉の冷却装置を電力系統に接続させることに邁進していた。後

先省みずに逃げ出さなかったのである。

もしかしたら、摩訶不思議なのは日本人の行動ではなく、日本人の自制力、規律、冷静さに対する我々ドイツ人の驚愕心が可笑しいのではないか。もういちど三島憲一を引用しよう。フランクフルター・レントシャウ紙上に三島は次の見解を発表した。「数年前にザクセン州が大洪水に見舞われたとき、そこの市民の大半は、日本人達とおなじような自制心をもち、積極的に救難・救援に向向いたではないか。当時、なんでも自分のほうが物知りと思い込む一人よがりの日本人達は賛嘆の念で、『トイトニア人（ドイツ人）に備わる天分の組織力、ゲルマンの耐久力および根性』を高く評価したが、そのような言動は実に愚かだったのではないか。我々も、未知の民族の国民性を十把ひとからげめに判断しないように慎重であるべきと考える。

それでもなお、日本人が平静さを保ち、感嘆すべきことに社会的秩序を維持し得た理由を問うことは妥当と考える。日本では略奪も、暴行狼藉もみられなかった。2005年のハリケーン・カトリーナ後のニューオーリンズ市の状況と、日本人の態度を比較すれば、災害を克服する日本人の文明度をうかがい知ることができる。ディ・ヴェルト紙の記者ウーヴェ・シュミット (Uwe Schmitt) が同紙に書いたように、「『強者の絶望的な権利』が支配したニューオーリンズ市と日本の状況は抜本的に違う」のである。

昔から日本人は揺れる大地の上で生活してきた。日本に文明が芽生えた当初から地震、台風、津波は存在していた。「ものの無常」は、日本で周知のことである。全国神社の本宗と位置づけられる伊勢神宮は20年ごとに遷宮（諸神社の正殿を造替して神座を遷し造替）される。日本人は、技術で自然を打ち負かせると信じるほど愚かではない。しかしながら、自然の脅威を可能な限

り制御するために技術を完璧なものに近づけるよう最大限の努力を講じている。

自然の暴威を前に個人は無力で、逃げるしか打つ術はない。これが、みずからを集団の一員として位置づける日本人の共同精神が生まれた歴史上の深い理由なのかもしれない。共同精神は、とすれば社会的な強制力、追従主義、黙々的な絶対服従に転換してしまいがちだが、実際日本の歴史にはそのような不名誉な諸例がみられる。几帳面が転じて過剰な取り締まりとなり、厳格な階級組織を信奉するあまりに柔軟な対応力が萎縮し退化してしまうのである。一般に、日本人には創造力および自己責任力が欠けるといわれるが、それらを補填するのが犠牲をいとわない献身性である。しかし、だからといい、日本人のヒロイズム（英雄的精神や行為）を世界無比と断定することに関しても、我々は慎重でなければならない。たとえば、2001年9月11日の同時多発テロ攻撃の後に世界貿易センターの階段を駆け上った警察官達が本日なおアメリカで

目次

巻頭寄稿文 軽薄な無知 マティアス・ナス	1~2
その他の事業報告・ 編集後記	3
ベルリン日独センターと 東日本大震災	4~5
インタビュー ルプレヒト・フォン・ドラ	6
2011年事業計画	7
2011年『オープンハウス』	8

英雄として称賛されているように、人助けの倫理は世界中でみられるものだからである。

アメリカの警察官の決死の覚悟同様に、福島原子炉を制御するために志願した日本人作業員達の沈着冷静な態度も感嘆的となった。「福島の50人の作業員」は、新しい英雄伝説を築いた。

忠義、忠誠、犠牲をいとわない献身性——これらが日本人の日常生活において、ドイツ人の日常生活と比べて大きな役割を担う訳ではないであろう。しかしながら、君主の死後も忠義を守り、2年後に旧主の仇の家に討ち入り、その屈辱を報復し、栄誉を挽回した後に切腹殉死した赤穂四十七士の物語は日本人なら誰もが知っている。赤穂浪士は忠義の象徴である。これとは反対に、太平洋戦争末期に連合軍艦艇に対する体当たり攻撃を実行した特別攻撃隊は、現在の日本人の視線では、天皇陛下に対する忠義誓約をもってみずから服従した狂信的な犠牲崇拜の具現にすぎない。

戦前、戦中の天皇は神と崇められていたが、1946年1月1日に新日本建設に関する詔書(人間宣言)が官報により発布され、同年11月3日公布の日本国憲法で「天皇は、日本国の象徴であり日本国民統合の象徴」と定められた。しかしながら、去る3月16日に、国民に対する今上陛下じきじきのメッセージが、しかも初めて時局的な理由からテレビで放映されたとき、日本は一体となって耳を澄ました。「関係者の尽力により、事態のさらなる悪化が回避されることを切に願っています」という陛下のメッセージは、「想定可能な超最大規模の原発事故を回避するために人事を尽くすように」という直接的な命令として以外に理解されようがなかった。

日本の若者の多くは、皇室に全く関心を示さないであろう。しかしながら、上の世代の多くの人々にとって天皇制度は未だに「日本の唯一性」の象徴であり具現である。このような考え方は一歩間違えると大事にいたる、地雷が敷設されたグレンデに近づくようなものである。というのも「唯一性」および「純血腫を尊ぶイデオロギーと優越感による慢心」の境目は極めて小さいからである。元バイエルン州首相エドムント・シュトイバー(Dr. Edmund Stoiber)にとって「諸民族が混在する社会」が恐怖であるように、日本人の多くは外国からの移民を恐れている。現在なお日本の人口において外国人が占める割合が

1パーセント強でしかないのには、それなりの理由がある。

オランダ出身のジャーナリストで作家のイアン・ブルマ(Dr. Ian Buruma)は、「あらゆる国民のなかでもっとも島国的性質の顕著な国民は日本人で、「その立国以来常に大きな文明の周縁に位置しつづけた日本の神経症」と書いている。その名著『戦争の記憶』**でブルマは「日本人であることは何を意味するのかという質問——日本人の特徴の本質は何によって成るのかという質問——は誰もがつつき回す腐った歯のようなものである」とも言っている。日本学者のイルメラ日地谷キルシュネライト(Dr. Irmela Hijiya-Kirschneireit)は、日本を「全く異質なもの」として捉える西洋人による日本の様式化に対して警鐘を鳴らす(『異国情緒の終焉』***と同時に、うさん臭い日本人論に表れる「日本自身によるみずからの異国情調化」の存在も指摘する。日地谷キルシュネライトによると、「日本的なるものの純粋性と無垢」を死守しようとする日本人は少なくない。

自己の特別な存在理由に対する日本の希求は強い。日本のメディアは年中行事のように、日本人の特性に関する論争を掲載している。「病的ともいえる不安感の対象としての日本魂」とブルマは書く。「国民の魂がどのように生きつづけ、守られるかだけでなく、外界に対する模範として高く掲げつづける必要性——この漠然とした何某かについて政治家、ジャーナリスト、学者は永遠に頭を悩ましつづける」

以上のような状況を見ると、「日本とドイツは全く同じだ」と叫びたくなるではないか。ザラツィン論争****は、ドイツの本質に関する際限のない饒舌の直近の現象以外の何ものだったのだろう。高齢化が進み、人口が減少する国民が抱える不安感、歴史に対する疑心、正常性に対する疑問、自然神秘と技術崇拜の奇妙な統合——面白いことに、これら日本的といわれる事柄は、我々ドイツ人も周知のことではないか。エキゾチックなのは冷静な日本人ではなく、浅薄な視線を異文化に投じる我々ドイツ人である。思い切った予測を述べるならば、日本に対する我々ドイツ人の関心は、福島の放射線濃度とともに薄れてゆくであろう。

しかしながら、幸いなことに福島は「いたるところに」に存在する訳ではなく、未だ第二のチェルノブイリにもなっていない。これは、まさに数百人の労働者と技術者のお陰である。そしてまた、涙を流しながらも作業に着手した規律正しい国民の冷静な行動のお陰である。

編集部注

著者のマティアス・ナス氏(写真下)はディ・ツァイト紙の外信局長で、ベルリン日独センターの副総裁です。本文章は2011年3月24日にディ・ツァイト紙で発表され、同紙の許可を得て本紙に転載しました。この場を借りて感謝します。

* 「durchrasste Gesellschaft」(諸民族が混在する社会)は、バイエルン州首相在職時にエドムント・シュトイバー(Dr. Edmund Stoiber)が、外国からの移民がドイツの人口において占める割合が増加したことを表現するために用いた言葉で、直訳すると「民族浸透された社会」といった意味。1991年の「粗悪な流行語大賞」に選ばれた。

** Ian Buruma: God's Dust: A Modern Asian Journey, Behind the Mask, The Wages of Guilt: Memories of War in Germany and Japan(1988年、Farrar, Straus, Giroux 出版)。邦訳は石井信平の訳で『戦争の記憶——日本人とドイツ人』として2003年に筑摩書房より刊行。著者は独訳『Der Staub Gottes: Asiatische Nachforschungen』(1992年、Eichborn Verlag 出版)から引用。文中の邦訳はドイツ語からの編集部訳。

*** Irmela Hijiya-Kirschneireit: Das Ende der Exotik(1988年、Suhrkamp 出版)。「異国情緒の終焉」という邦訳題名は編集部訳。

**** 2010年8月末に出版されたティロ・ザラツィン(Thilo Sarrazin、ドイツ社会民主党所属の政治家)の著書『Deutschland schafft sich ab』(意訳:ドイツはみずからを撤廃させている)を契機に始まった論争。出生率の低下と、イスラム系移民の増加による影響を考察するザラツィンの著書は発売以来約3ヶ月で100万部を超えるベストセラーとなり、世論を二分する激しい議論を呼び起こした。その後ザラツィンは、移民に差別的でナチス思想を想起させるという理由でドイツ連邦銀行理事を解任されたが、社会民主党からの除名は免れた。





2011年5月23日および24日にベルリン日独センターで開催された第5回日独韓奨学生セミナー(第12回日独奨学生セミナー)の会場



2011年4月14日にドイツで初めて全国規模の「ボーイズ・デー」が実施され、ベルリン日独センターも参加しました。「ボーイズ・デー」は男子中学生を対象に、主に女性が従事する職業に対する関心を喚起させることを通じて男女雇用均等を促進する活動で、「ガールズ・デー」と対を成しています。当日は、ベルリンの13歳から14歳の男子生徒11人がベルリン日独センターを訪れ、関係部署の(主に女性)所員から「マンガをテーマとする日独会議ないしは国際会議」を企画準備する手順を学んだ以外にも、日本文化に触れる機会を得ました。研修に参加した生徒および指導にあたった所員ともに楽しんだ一日の終了後、ベルリン日独センターは来年度の「ボーイズ・デー」に参加する意欲を新たにしました。



新村卓之写真展『トポグラフィー——ベルリン・エレワン・パリ』開会式(2011年4月1日、於ベルリン日独センター)

『jdzb echo』読者の皆様

今回の『jdzb echo』では、3月11日に日本を襲った大きな災害と、その影響を中心に取り上げました。この度の災害は被災地の方々、そして日本国民の生活を一変させただけでなく、日本の友人諸氏にとってもひとつの区切りとなりました。本紙では、ベルリン日独センターがこの災害とその影響にどのように向き合っているかをご報告いたしました。

巻頭寄稿文からも読み取れるように、日独間のスムーズな情報の交流が求められています。まさにこのようなときにこそ、日独の出会いの場としてのベルリン日独センターの機能が重要であり、本課題を遂行すべく努力する所存です。また、7月7日に開催する日独シンポジウム『東日本大震災と新旧メディアの役割——日独における地震報道に関する比較の視座』では今般の災害時におけるメディアの役割について討議いたしますが、皆様方もご参加くださいますようお願い申し上げます。その前の6月25日にはベルリン日独センター恒例の「オープンハウス」を開催します。その際にも種々募金活動を行ないますので、どうぞご来場ください。

「オープンハウス」の前日の6月24日には、浩宮殿下がベルリン日独センターを訪問されます。殿下は「日独交流150周年」の日本側名誉総裁として、日独間の強い絆について語られる予定です。

フリデリーケ・ボッセ
(Dr. Friederike Bosse)
ベルリン日独センター事務総長

jdzb echo

ベルリン日独センター広報紙『jdzb echo』は四半期毎(3月、6月、9月、12月)に刊行されます。

発行: ベルリン日独センター(JDZB)
編集: ミヒヤエル・ニーマン
E-Mail: mniemann@jdzb.de

本紙『jdzb echo』はPDF版をホームページからダウンロードすることも、eメールでの定期購読も可能です。

連絡先:
Japanisch-Deutsches Zentrum Berlin (JDZB)
Saargemünder Strasse 2, 14195 Berlin, Germany
Tel.: +49-30-839 070 Fax: +49-30-839 07 220
E-Mail: jdzb@jdzb.de URL: http://www.jdzb.de

図書室の開室時間は火曜日と水曜日 正午12時～午後6時、木曜日午前10時～午後4時です。貸し出しサービス実施中!

友の会連絡先: freundeskreis@jdzb.de

東日本大震災とそれともなう大津波、さらには福島原発事故を前にベルリン日独センター所員も悲嘆および動揺を隠すことはできず、被災地支援のために新たに以下の活動に着手しました。

1. 被災地の青少年のために義援金口座を開設し、義援金募集活動
2. 会議系事業および人的交流事業をはじめとする諸事業のテーマに東日本大震災・原発事故を取り上げる
3. 日本支援に関する外部からの様々な照会事項に対し、可能な限りの情報提供サービス

1. 義援金募集活動

ベルリン日独センター館内において種々検討した結果、ベルリン日独センター独自の義援金口座を開設し、集まった義援金は被災地の復興活動に資する青少年支援に直接かかわる事業に拠出することとし、募金活動を開始しました。現在、日本の協力機関とともに、具体的かつ持続可能な支援プロジェクトを調査中ですが、支援先を決定するまでには未だ時間を要します。これまで義援金を寄せられた皆様方に感謝いたしますとともに、支援プロジェクトのご報告ができるまでもう少しお待ちくださいますようお願いいたします。

ベルリン日独センター独自の義援金募集活動として、4月に3件の追悼チャリティーコンサートを開きました。無償でご協力くださった音楽家の皆様および寛大なご寄付をくださった聴衆の皆様方に心から御礼申し上げます。そのほかにも、新村卓之写真展の開会式の際にベルリン日独センター日本語講座の初級クラスの受講者がケーキビュッフェを開き、集まった寄金がベルリン日独センターの義援金口座に入金されました。さらに、ベルリン・シュöneベルク地区のフィーノウ小学校の6年生、ベルリン・シュテグリッツツェーレンドルフ区のメルカトル小学校の6年生などが集めたお小遣いもベルリン日独センターの義援金口座に入金されました。また、ベルリン在の各国アーティストによる作品の抽選分配会や競売会といった募金活動もありました。ベルリン日独センターのドイツ語版URLの「Spenden für Japan」に簡単な紹介文および写真を掲載いたしましたので、どうぞご参照ください。



4月15日開催の第2回追悼チャリティーコンサートに出演中のベルリン国立歌劇場児童合唱団

2. 会議系事業および人的交流事業

東日本大震災と原発事故はベルリン日独センター事業にも著しい影響を及ぼしました。以下に、時系列に報告いたします。

- ・ 3月17日および18日にベルリン日独セ



ンターで開催を予定していた映画&ディスカッション『マンガは文学?』を予定どおりに実施する件に関しては賛否両論ありましたが、協力機関の日本ペンクラブとも協議した結果、開催に踏み切りました。その後、実施にいたるまでのジレンマに関する包括的な報道がシュピーゲル・オンラインに『Hexe Kiki hilft Japanern beim Weiterleben』(意訳:震災後の日本人を応援する魔女キキ)というタイトルで掲載され、実施は適切であり、極めて有意義な

事業であったと評価されました。

- ・ ダイムラー株式会社および三菱ふそうトラック・バス株式会社の資金手当を得て実施する「日独高校生交流のためのプログラム」では、3月に予定していた仙台の高校

4月28日開催の第3回追悼チャリティーコンサートに出演中の小宮尚子(ピアノ)およびギンター律子(ソプラノ)

生のドイツ訪問旅行を2012年春に延期しました。また、3月ないしは4月に日本訪問を予定していたドイツの高校生2グループの旅行がキャンセルされました。7月に予定している日本の高校生のドイツ訪問旅行は実行される見通しです。

- ・ 独日法律家協会と慶応義塾大学と共催で4月14日、15日に東京で開催を予定していた日独法律学シンポジウム『法の継受と法整備支援』は、とりわけ慶応義塾大学側の事情で11月に延期となりました。

- ・ 5月に予定していた「日独青少年指導者セミナー」ドイツ団の日本派遣は秋に繰り延べとなりました。また、前年比でドイツ側応募者数が大幅に減少したのもこの度の災害の影響と思われます。

- ・ ロバート・ボッシュ財団の委託事業で、7月初旬に東京開校を予定していた「ヤングリーダーズフォーラム2011年度サマースクール」は、開催地を東京から大阪に移して実施します。

- ・当初企画していた日独会議『日独比較で考察する政治におけるリーダーシップ(統率力)およびプロフェッショナリズム(職業意識)』の代わりに、7月7日に日独シンポジウム『東日本大震災と新旧メディアの役割——日独における地震報道に関する比較の視座』をベルリン日独センターで国際交流基金との共催で開催することにしました。
- ・新たな企画として、経済広報センターの協力を得て9月に日独会議『東日本の復興』を東京で実施する予定です。

以上のように、この度の災害による影響は対処可能な範囲に止まりました。このようなきだからこそ、ベルリン日独センターは「日独知的交流の場」としての課題を遂行すべきと考え、3月中旬の映画&ディスカッション『マンガは文学?』を敢行しましたし、ドイツ連邦外務省が日本渡航自粛勧告を発出するなかでも「ヤングリーダーズフォーラム2011年度サマースクール」を日本で開校することを決定しました。青少年交流事業に関しては、まだ平常化といえる状況ではありませんが、各交流事業を継続すべく全力を尽くしております。

3. 情報提供サービス

- ・とりわけ災害直後の数日・数週間に、種々情報を求める照会および日本支援の可能性に関する照会が数多くベルリン日独センターに寄せられました。たとえば、

日独のインフォメーションデザイナーのグループが原子力にかかわる専門家を照会してきた際には、「ヤングリーダーズフォーラム2010年度サマースクール」に参加した日本の核研究者を紹介しました(照会グループは、放射能汚染の状況を一目で分かるグラフィックデザインで表現するために専門家の協力を求めていました)。また、メディアからの複数件の照会に対し、ベルリン日独センター所員がインタビューに応じた以外にも、多くの日本人やドイツ人をインタビューイ(インタビューされる人)として紹介しました。

- ・ベルリン日独センターはドイツ連邦外務省の依頼を受け、支援する側と受ける側のマッチングを担当することになりました。そこで、ドイツ連邦外務省に日本支援



4月8日開催の第1回追悼チャリティーコンサートにおける神余隆博(Dr.) 駐独日本国大使、ハンス=ヨアヒム・デア(Dr. Hans-Joachim Daerr) 元駐日大使、フリデリーケ・ボッセ(Dr. Friederike Bosse) ベルリン日独センター事務総長

部署として設けられた「海底地震部」、ドイツ連邦外務省より日本支援担当に任命されたハンス=ヨアヒム・デア(Dr. Hans-Joachim Daerr) 元駐日大使、在独日本国大使館とも詳細に協議し、支援側の現状調査のために、支援措置を予定している機関の代表者を招聘したラウンドテーブル会議を開きました。3月31日の会議に参加したのはドイツ都市会議、各ドイツ連邦州、ドイツ各地の独日協会、独日友好議員連盟をはじめとする多数の機関です。

展望

日本における災害後、ドイツでもお悔やみ、見舞い、同情、激励の声が高まり、支援の申し出が続出しました。寄付をする人々や機関の多くは、具体的な目的のために寄付することを望み、支援プロジェクトに関する情報を求めておられます。しかしながら、災害の規模が余りに甚大なため、ベルリン日独センターの日本の協力機関のみならず、内外の救援組織や地元の関係組織も未だに災害の状況把握に努め、復興の計画・準備の段階を超えていません。まだまだ忍耐と根気が必要な状況です。ベルリン日独センターは皆様方からお預かりした浄財をどのように活かすか、またその正しい運用方法に関しても関係機関と慎重な協議を重ねています。引きつづきベルリン日独センターをご信頼くださいますようお願い申し上げます。

東日本大震災募金

この度の東日本大震災とそれにともなう大津波により亡くなられた方々に心から哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。併せ、お力落としと大混乱の中、なお大きな犠牲と忍耐を強いられている被災地の皆様方に心からお見舞い申し上げ、惨状の中でも希望を失うことなく、励ましあいのうちに歩を共にされますようお願い申し上げます。また、福島原発事故の早期解決および被災地の一日も早い復興を願ってやみません。

私どもベルリン日独センターにできる第一歩として、被災地の青少年を支援する義援金口座を開設いたしました。ベルリン日独センターは長年青少年交流事業に携わっており、日本国内の多くの青少年事業機関・組織と関係があります。このネットワークを通じて、皆様方からお預かりする義援金が本当に支援を必要とするところに届くことを保証いたします。青少年こそ、国の将来の担い手です。

東日本大震災義援金の振り込み口座は以下のとおりです。

Kontoinhaber (口座名義) : Japanisch-Deutsches Zentrum Berlin

Kontonummer (口座番号) : 6000054902、BLZ (銀行番号) : 100 500 00 (Landesbank Berlin)

Verwendungszweck (送金用途) : „Japan helfen“

5月末までに、16万ユーロを超える募金が集まりました。

ご支援、感謝いたしますとともに、皆様のご協力をお願いいたします。

2011年3月11日の日本における地震、津波、原発事故という三重の災害は、ドイツの世論が再び日本を注目する契機となり、ベルリン日独センターをはじめ日本関連の事業に従事する機関および人々の日常に大きな影響を及ぼしました。このような機関のひとつが、日独交流を促進する目的でドイツ全国に設立された約50の独日協会を統合する連盟として発足した全国独日協会連合会(VDJG)です。本紙は同連合会のルプレヒト・フォンドラン会長(Dr. Ruprecht Vondran)に東日本大震災後の活動についてインタビューしました。

編集部:日本からの凶報に接したとき、フォンドラン会長は何を思われましたか。

フォンドラン:3月11日の午前中、私は遠方に出掛ける途中で高速道路を運転しており、たまたま止まったドライブインのテレビで恐ろしいニュースに直面し、画面に流れる震撼させられる映像を前に、想像を絶する災害の規模を把握できずにおりました。そして、そのドライブインから、全国独日協会連合会の古森重隆会長とその同僚の方々に、全国独日協会連合会を代表してお悔やみとお見舞いのメッセージを発信しました。その後で、50の会員協会およびあらゆる友人・知人に対し、日本支援を呼び掛けました。

編集部:全国独日協会連合会は、全国各地の日独協会および全国日独協会連合会と長年友好関係を維持し、交流をつづけてこられました。被災地の日独協会からどのような情報が届きましたか。

フォンドラン:被災地の方々は内面の悲嘆や動揺にかかわらず、対外的には平静を装い、至難の時期にあっても極めて秩序正しく、苦難に耐え、互いに支援し合っておられます。日本国内では書面あるいは口頭で激励と応援のメッセージ「頑張れ東北、頑張れニッポン」が各所でみられます。

編集部:ドイツでも様々な募金活動がみられます。全国独日協会連合会も義援金口座を開設されましたが、どれだけの義援金が集まりましたか。また、その義援金を用いる具体的な支援策は決まっていますか。

フォンドラン:全国の会員協会が集められ、全国独日協会連合会の共同口座に入金された義援金総額は100万ユーロになります。これは、大口寄金者によるものではなく、幼稚園、学級、友達のサークル、手工業者仲間、消防士達をはじめとする多数の小口寄金および各地域における様々な募金活動の成果です。全国日独協会連合会に務める者は全て無給で活動していますので、総額がそのまま被災者支援に回ります。個々の使用目的は、日本の協力機関の関係者と相談して決めます。

編集部:全国独日協会連合会の有志が4月12日から28日にかけて東京から軽井沢、松本、高山を経由して日本海にいたり、関西までつづく日本交

流ツアーを敢行されましたが、そのときの印象を教えてください。

フォンドラン:この度の日本訪問は行く先々で「日本に対する特別な連帯感の表れ」と評価されました。というのも、被災地以外の放射線値が、ドイツの通常値を上回ったことが皆無であったにもかかわらず、多数のドイツ人がパニック状態で日本から脱出したり、日本の南部に引き篭もってしまっていたからです。

編集部:日本交流ツアーの最後の4月25日に奈良県で全国独日協会連合会と全国日独協会連合会の第3回日独パートナー会議が開催されましたが、どのような成果がありましたか。また、この度の災害が今後の協力活動に影響を及ぼすようなことが考えられますか。

フォンドラン:日独パートナー会議では祝賀的色彩のある記念式典および講演会を予定しておりましたが、計画を変更し、大安寺で震災追悼法要をしました。河野良文貫主(奈良日独協会会長)による厳かな読経のなか、震災物故者を追悼し復興促進を祈願しました。その後、荒井正吾奈良県知事および駐日ドイツ大使の列席を得た作業会を開き、被災により様々なチャンス奪われた東北の青少年の育成のためにドイツからの義援金を用いることに合意したのが最大の成果です。

編集部:2011年は「日独交流150周年」の記念の年ですが、東日本大震災という悲惨な影が落ち



ました。それでも、適切な形で記念事業を継続し得るチャンスがあるとお考えでしょうか。

フォンドラン:津波に見舞われたからといって、今後の計画まで流し去られることがあってはいけません。このような状況においてこそ、150年かけて培った日独共同の財産を認識することが極めて重要です。年内に複数件のハイライト事業が実施される予定です。そのひとつが、独日協会連合会が企画した展覧会「Ferne Gefährten -- 150 Jahre deutsch-japanische Beziehungen」(意訳:遠くの仲間——日独交流150年)ですが、ドイツ連邦外務省、ドイツ文化財団、ライス・エンゲルホルン財団から寛大な資金手当を得ただけでなく、ペータ・パンツァー先生(Dr. Peter Pantzer、元ボン大学日本学教授)をキュレータに迎えることに成功したことを誇りに思います。本展覧会は10月末にマンハイムで開会予定です。

編集部:近未来における日独交流に何を期待されますか。

フォンドラン:現在の日独交流は、年齢の高い世代が中心に担っています。今後は、青少年の豊かなアイデア、理想主義、ダイナミズムを取り込む必要があります。



東京の久米美術館にて写真右から著者、マリアンネ・メンヒ(Marianne Mönch)ボン独日協会名誉会長、久米邦貞ベルリン日独センター総裁、同夫人(2011年4月)

東日本大震災との関連で、一部の事業が中止または延期となる可能性あり。詳細はURLでご確認ください。

会議系事業

国際社会における日独の共同責任

日独シンポジウム『アジアにおける米中関係——
摩擦それとも協力』

協力機関：ドイツ・アジア研究所（ハンブルク）
2011年6月17日

国際シンポジウム『ドイツ・日本・ロシア——
未来へのチャンス』

協力機関：コンラート・アデナウア財団、世界平
和研究所（東京）
2011年10月7日、東京開催

日独安全保障問題ワークショップ

協力機関：ハインリッヒ・ベル財団（ベルリン）
2011年12月6日

天然資源、エネルギー、地球温暖化、環境

日独シンポジウム『持続可能なツーリズム』

協力機関：ドイツ連邦環境・自然保護・原子炉
安全省（ベルリン）、環境エネルギー政策研究
所（東京）

開催予定日：2011年11月初頭、東京開催

第2回日独ソーラー・デー

協力機関：有限会社パイエルン・デザイン、日本
産業デザイン振興会（東京）
開催予定日：2011年11月18日、東京開催

日独会議『人工の自然地域——社会経済的変
遷における生物多様性』

協力機関：東京大学農学生命科学研究科、
ゲーセン大学

開催予定日：未定

少子高齢化社会

日独シンポジウム『伝統的な成長産業と新しい
成長産業——それぞれの未来』

協力機関：富士通総研（東京）、フリードリヒ・エーベ
ルト財団（ベルリン）、ドイツ経済研究所（ケルン）
2011年6月28日

第二回日独ワークショップ『長期介護』

協力機関：ドイツ連邦保健省（ベルリン）、厚生
労働省（東京）

2010年8月29日～30日

学術振興を通じた社会発展

日独シンポジウム『次世代の指導的研究者支援』

協力機関：ドイツ研究振興協会（東京）、科学技
術振興機構（東京）

2011年7月15日、東京開催

日独シンポジウム『日独学術交流の歴史と現状』

協力機関：ハレ・ヴィッテンベルク大学
2011年11月10日～11日

国家、企業、市民社会

日独シンポジウム『東日本大震災と新旧メデ
アの役割——日独における地震報道に関する
比較の視』

協力機関：国際交流基金（東京）

2011年7月7日

日独会議『東日本の復興』

協力機関：経済広報センター（東京）

2011年9月30日、東京開催

日独会議『幸福——文化による相違は存在す
るか』

協力機関：ドイツ日本研究所（東京）

2011年11月21日～22日

諸文化の対話 「日独交流150周年」

国際フォーラム『縄文時代の現象とユーラシア
の新石器時代』

協力機関：ドイツ考古学研究所（ベルリン）、函
館市埋蔵文化財事業団

2011年10月28日～30日、函館開催

パネルディスカッション『ベルリンの文化機関
紹介』

協力機関：東京ドイツ文化センター、芸術文化
祭 YOU ARE HERE: BERLIN TOKYO（東京）

開催予定日：2011年11月初頭、東京開催

専門家ラウンドテーブル『日独のデジタルメモ
リー』

協力機関：ボン大学、ブリュクナー & ブリュク
ナー社（ベルリン）

開催予定日：2011年下半期

特別事業

『日独フォーラム第20回全体会議』

協力機関：日本国際交流センター（東京）
2011年10月4日～5日、東京開催

文化事業

コンサート

ダーレム音楽の夕べ

2011年6月10日、19時30分開演

2011年9月16日、19時30分開演

オープン・ハウス

2011年6月25日、14時開会

展覧会

写真展『東京 & 新潟——震災前の周辺県』

オープニング：2011年6月15日（水）、19時
展覧会会期：6月15日～30日：月曜～木
曜、10時～17時、6月25日（土）：14時～21時
展示期間：2011年6月30日まで

北斎展

オープニング：2011年8月25日（木）、19時
会場：マルティン・グロウピウス・パウ（ベルリン）
展示期間：2011年10月24日まで

人的交流事業

- ・若手研究者招聘事業
- ・日独ヤングリーダーズ・フォーラム
- ・研修プログラム

日独青少年指導者セミナー

- ・日独勤労青年交流プログラム
- ・日独学生青年リーダー交流プログラム
- ・日独高校生交流のためのプログラム

各プログラムの詳細はwww.jdzb.de → 人的
交流事業

展覧会の観覧時間：

月曜日～木曜日10時～17時

金曜日10時～15時30分

会場についてほかに記載のない場合はベ
ルリン日独センターで開催します。
詳しくはwww.jdzb.de → 個別事業



日本開催イベント情報

<http://www.dj150.jp/events.php>

ドイツ開催イベント情報

<http://www.de.emb-japan.go.jp/dj2011/index.html>



プログラム ※

午後2時から

- ・ 生け花のデモンストレーションと作品展示
- ・ 折り紙講座
- ・ 習字講座
- ・ 日本語体験講座
- ・ 書籍市(日本語書籍、日本関連ドイツ語書籍)
- ・ 屋台(寿司、天ぷら、蕎麦、飲み物)(午後9時30分まで)
- ・ 茶会



午後2時15分 開会の挨拶およびベルリン日独センター紹介

午後2時30分～6時 指圧デモンストレーション

- ・ 午後2時30分～4時: 自己治癒力向上のための経絡ストレッチ
- ・ 午後4時～6時: 個別療法

午後2時45分～6時15分

ミニ講演(題名はURLをご覧ください)



午後3時、4時 日本語とドイツ語で子供の本の読み聞かせ

午後3時、3時45分、4時30分、5時15分

ワークショップ『マンガを描こう』(各ワークショップ定員20人)

午後7時

「モダン・ダンス」針山愛美

午後7時45分

和太鼓コンサート



※出し物等は一部変更することもあります。あらかじめご了承ください

東日本大震災の被災者支援のための義援金箱も設けますので、ご協力をお願いいたします。